

「教学と現代10」海外伝道の現状と課題シリーズ

—ヨーロッパの宗教事情と天理教の伝道—報告：第1回

金子 昭

標記の講座が1月28日、天理大学研究棟第1会議室にて開催され、天理大学及び天理教海外関係者など約50人が参加した。この講座は、おやさと研究所が天理教教祖130年祭(2016年)までの今後3年間の企画「海外伝道の現状と課題シリーズ」の第2回目にあたる。

今年度は、場面をヨーロッパに移して、2013年3月に新たに南米出身の法王が選出されたローマ・カトリック教会に光を当て、法王交代後のヨーロッパの宗教・社会・政治がどのような変化をしているのか、またその中で天理教のヨーロッパ布教伝道は今どのような道を展開しているのか、その現状と課題について取り上げるようになった。

深谷忠一所長による開会挨拶に続いて、担当の金子昭が趣旨説明を行った後、第1講として、辻信一郎・天理教海外部翻訳課員が「法王交代後のヨーロッパと『世界宗教者平和の祈りの集い』」というテーマで講演。前半を新しいローマ教皇の動きについて、後半を昨年の「世界宗教者平和の祈りの集い」について話した。辻氏は、まず、日本のカトリック中央協議会では「法王」ではなく、「教皇」という称号を用いているということで、講演でもフランシスコ教皇と呼ぶことに注意を促した(本報告でも以下、教皇とする)。

フランシスコ教皇は、神父による性的虐待や教皇庁内での権力闘争などのスキャンダルに揺れるカトリック教会内において、今一度、清貧と貞潔の基本に立ち返ろうと、さまざまな動きを始めていると言われる。フランシスコが改革に積極的だというイメージがメディアで盛んに取りざたされているが、実情は必ずしもそうではない。

避妊具の使用、同性愛、人工妊娠中絶問題については、いずれも否定的である。その理由は、教義上明確なので、今さら何もう必要がない、ということである。また、聖職者の独身制についても、カトリックでは司祭は純潔を守るべきという原則をくずさず、従前通り独身男性に限ると言明した。女性の司祭はありえないということで、リベラル派のカトリック信者を失望させている。一方、一部の者のための教会ではなく、万人のための教会に変えたいという思いは強くあり、とくに貧者とともに歩む姿勢を顕著に打ち出している。

ところで、「世界宗教者平和の祈りの集い」は1986年に始まったが、天理教はその第1回から公式に参加している。その背景には、大ローマ布教所の山口所長と当時、カトリックの諸宗教渉外局の尻枝神父との交流があった。この集いは聖エジディオ共同体とローマ司教区の共催になるもので、諸宗教が対話を通じて、相互に理解しあい、尊重しあうことをめざしている。今回は第27回目であり、辻氏は通訳として諸宗教の交流に尽力し、宗教協力が異文化交流の場であるということについて、ユーモアを交えながら様々なエピソードを紹介した。

第2講では、永尾教昭・天理教元ヨーロッパ出張所長(現・

天理教道友社社長)が「天理教のヨーロッパ伝道を振り返る—現状と課題—」を講演。天理教はフランスのパリに1970年にパリ出張所(現ヨーロッパ出張所)を開設、2014年で44年目を迎える。ヨーロッパ出張所の歴史がそのまま天理教のヨーロッパ伝道の歴史になる。天理日仏文化協会や天理日本語学校を通じて文化活動を積極的に展開しながら、キリスト教の伝統の根強いヨーロッパでの布教伝道を推進している。

永尾氏は現在のヨーロッパにおける天理教の教勢について紹介した後、25年間の滞在経験を踏まえ、今後のヨーロッパ布教のためには、イニシエーション(入信儀礼)の構築など信仰を深めるプロセスの整備などを行っていく必要があることを述べた。

またヨーロッパ出張所の充実策として、“主”はヨーロッパ人であり、“客”も信仰を求めて参拝に来た人であるという基本姿勢の下に、神殿講話をフランス語に切り替えたところ、内容における目の向け方が変わってきたことを指摘。その上で、(1)日本人村の破壊、(2)聖(公)と俗(私)の峻別、(3)人間に聖俗(出家と在家)の違いがないことの説明、(4)やや回り道をして教えを説くこと、(5)「みかぐらうた」の各国語への翻訳、という5点について具体的な提言を行った。

そのほか、文化活動の充実による社会貢献の必要性、日本的慣習を持ちこまないことについても言及。とくにヨーロッパのような文化の先進地域においては、教内関係者が互いに知恵を出しあって、もっと布教伝道のために戦略・戦術を練っていくべきだと、永尾氏は力強く訴えた。

最後に、佐藤浩司主任の司会進行による総合討議が行われた。「世界宗教者平和の祈りの集い」での天理教の発表への反響、また天理教がバチカンと交流を行っている理由やその経緯、さらに海外のようばく子弟の教化育成や、ヨーロッパにおける戸別訪問などの布教伝道のあり方などについて、活発な質疑応答が交わされた。その中では、世界の諸宗教者の集いを天理で開催できるのではないかという意見も紹介された。

深谷所長は、閉会挨拶の中で、この講座が今後の海外伝道における当研究所の役割を再考し、教学協働を進める上できわめて意義のある出発点となったと述べた。

本誌では、来月号より2人の講演の要約を順次掲載していく予定である。



講師を囲んでの記念撮影